



家族のリアルを見つめる



東京大学大学院教育学研究科教授 本田 由紀

「家族」と呼ばれる人間の集まりは、一般的に言って、以下のようないくつかの特徴を備えている。

第一に、それを構成する人間の数は数名程度であり、規模が小さい。

第二に、その成員がそうでないかを区分する基準は、血縁もしくは愛情であり、前者の場合は個人の意思による選択の余地がないのに対し、後者はきわめて感情的な要素による選択がなされる。すなわち、対極的な二種類の基準が併存しているが、血縁の場合も愛情が存在することが前提とされている。

第三に、親子やきょうだいといった血縁関係は、多くの場合、年齢差を伴っている。その年齢差は親子の場合は20～40歳程度、祖父母と孫の場合は40～80歳程度にまで拡大する。こうした異なる世代が家族内部には含まれており、年長の成員は年少の成員よりも多くの経済力や権力などの資源を有していることが多い。それらの資源は年少の成員に対して行使されるとともに、長期間の関係を通じて共有・伝達・譲渡もなされる。

第四に、家族内では衣食住といった生命や生活の基盤的行為が行われるだけでなく、娯楽、休息、指導などきわめて多様な行為が行われる。その行為の内容や分量については家族成員内でのローカルルールや選択や交渉の余地が大きく、また家族間での差異も相当に大きい。

第五に、家族は、成員内部の安寧や存続を優先的

な関心事とし、外部にはそれに匹敵するほどの関心を払いきくい。

このように改めてその特徴を挙げると、家族とは非常に不思議な、もしくは不自然とも言える集団である。特定の狭い人間同士で、選んだり選ばなかったり、威圧されたり頼りになったり、何をするか・どのようにするかは様々であり得るし、自分たち本位のエゴイズムの巣ともなる。愛情の存在という前提が家族には強く結びつけられているため、家族は通常、「良いもの」として表象されるが、愛情という感情はフラジャイルに変動するものであり、その存在・維持という前提に対する原理的な保障は何も無い。むしろ、少ない人数間で生活をともにし長期的で濃い接触を続ける中で、内部での関係がこじれる場合や、資源が不足・欠如する場合はいくらでも生じ得る。すなわち、家族は時には最悪の桎梏や問題源となるリスクを含んでいるのである。

堅苦しい言い方をしてきたが、要するに、家族にそのリアルな実態以上の美化や期待をしてはならないということである。人類の歴史上、形態は様々であれ長く存続してきた家族という集団を解体しようとするのは非現実的である。しかし、現実至今ある家族は、脆弱さを多分にはらんでいるのであり、家族に依らなくとも個人が生きてゆける場や仕組みを整えていくことが、社会と世界にとって、はるかに重要である。

パリのフェミニズム図書館： 移転・消滅の危機に抗して

見崎 恵子 (元愛知教育大学教授)

2017年11月18日土曜日、パリ13区にあるマルグリット・デュラン (Marguerite Durand) 図書館の前広場及び舗道は、数多くの人々、色とりどりのプラカード、次々と響き渡るマイク演説で盛り上がっていました。この図書館の移転・縮小に抗議・反対する活動家や市民の集会が開かれたのです。

マルグリット・デュラン図書館は、20世紀初頭の著名なフェミニストで、新聞『ラ・フロンド (La Fronde)』を発刊したマルグリット・デュラン (1864～1936年) がみずからのコレクションをパリ市に提供するかたちで、1932年に設立されました。フランス初の「フェミニスト資料室」として誕生したこの図書館は、1989年より現住所の図書館建物3階 (日本式4階) フロアを占め、パリ市専門図書館の一つとして発展してきました。まさにフェミニズム研究の「宝」だと言って過言ではありません。

このマルグリット・デュラン図書館に対して、パリ市はこの夏、4区にあるパリ歴史図書館 (Bibliothèque Historique de la Ville de Paris) へ移転・統合するプランを「選択の余地なし」として通告しました。閲覧・来訪者の減少や効率の悪さなどが理由に挙げられていますが、要はフェミニズム図書館としての専門スタッフを減らし、運営の自律性を減じ、資料の閲覧・研究を限定する方向に進んだということです。当然これに対してすぐさま全国の女性・フェミニスト研究者や団体、図書館連合組合やCGTなどが反対の声を上げました。とくにフェミニズム史料協会 (L'association archives du féminisme) のクリスティーヌ・バール (Christine Bard) さんらを中心に「マルグリット・デュラン図書館を救おうSauvons la BMD」の運動がインターネットを通じて立ち上がりました (<http://sauvonslabmd.fr/>)。この呼びかけで市長への請願署名も進みました。



筆者はブラウスの背にこの運動のシンボル・マークひまわりを手書きして参加しました。



2017年11月18日 参加した見崎が撮影。拡声器を持っているのがペローさん、その左手側 (写真中央) の女性がバールさん。

集会ではバールさんが代表挨拶を行った後、フランス女性史の大家で日本でもよく知られるミシェル・ペロー (Michelle Perrot) さんの力強い支援演説がありました。その後も団体代表や女性活動家たちが次々とフェミニズム研究の場、活動拠点としてのマルグリット・デュラン図書館の意義を訴え、寒空のなか、道行く人々も参加して熱気の溢れる大集会となりました (午後2時から夕方まで続きました!)。

20世紀末に始まった世界的な政治の保守化・反動化が、女性・フェミニズム関連政策・施設の停滞や後退をもたらしているなかで、フランス唯一とも言ってよい公的なフェミニズム図書館をどう守り発展させられるのか、フェミニストの力が問われていると感じました。

その後、12月に入ってパリ市から図書館宛てに、正式に、今回の移転案取り消しが通知されました。ツイッター等では「勝利だ!」「闘いが功を奏した!」などの喜びの書き込みが見られます。短期間で市長宛の署名も11,000名を超えたとのこと。しかし、「油断せず」「闘いの次の一步を!」といった声も聞かれ、息の長いフェミニズムの運動が求められています。

事業報告

2017年度 公益財団法人 東海ジェンダー研究所 賛助会員のつどい(公開)

対話と議論をめざす女性図書館 —Collection・Connection Development—

講演者 青木 玲子さん



昨年秋に開館したばかりの名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ(略称GRL)において、この1月27日、東海ジェンダー研究所恒例の「賛助会員のつどい」が、国立女性教育会館(NWEC)客員研究員の青木玲子さんを講師に迎えて開催されました。青木さんは、図書館というのは、単なる図書の収集と貸出業務で事足りりとするのではなく、これからの、特に女性図書館に求められるものは、主題とテーマ性を持たせた「コレクション」と、国内外の図書館や女性学関連のネットワークの中で活動するのに必要な「コネクション」であることを指摘されました。

特に強調されたことは、女性に関する歴史的事実を検証するための記録資料を体系的に収集・整理・保存し、しかもそれを公開・発信して女性関連資料の顕在化を図り、広く一般市民や研究者、ライブラリアン等の人々に活用してもらうことです。また、資料の発生プロセスや歴史的背景の研究・調査の必要性も、知の拠点としての図書館に喫緊に求められるものです。このような、アーカイブを含めた図書資料の収集・調査・研究の過程において、幅広い人的ネットワーク

の中で活発な「対話と議論」の場が生まれること、これが女性図書館に求められるものであるという指摘は、きわめて示唆に富むものでした。

講演の冒頭、日本の図書館の歴史に触れられたところで、明治に入り帝国図書館をはじめ様々な図書館が開設されていったが、その際「婦人閲覧室」が設けられ、それは昭和10年代まで続いたというお話には、会場から「エー?」という驚きの声も聞かれました。女性は図書館でも男性と席を並べて、男性と同じ書物を読む事はできなかったようです!ただ、これには会場から意見が出て、樋口一葉のように貧しかった女性には、婦人閲覧室でも無いよりはましであったという指摘があり、これはこれで成る程と納得したことです。

最後に、“Sharing the Past, Debating the Present, Creating the Future!” これは、青木さんの締め言葉で、会場の多くの方に感銘を与えたフレーズですが、歩み始めたばかりの女性図書館GRLが21世紀の知のパラダイム拠点となっていくうえで、まことに時宜を得た指標を頂戴いたしました。

日置 雅子(東海ジェンダー研究所業務執行理事)



講演会に
お寄せいただいた
アンケートから



「図書館にこんなに長い歴史、変せんがあったことに驚きました。」(60歳代)

「図書館も司書についても知らないことばかりでしたが、ジェンダーに特化した資料収集とその活用法についてのお話は目からウロコでした。図書館といえば大学の図書館での研究資料検索のイメージしかありませんでしたが、社会(国際も含めて)で起きていることを渦中に飛び込んで情報収集し、それを基に議論し、発信する(feedback)役割があることを痛感しました。」(70歳以上、研究者)

「婦人閲覧室のお話が興味深かったです。アーカイブスの活用、特に女性政策、女性運動への活用という点に興味があります。その視点からコレクションの重要性について、なるほどと思いました。ありがとうございました。」(60歳代、NPO団体)



お知らせ

共催事業

GRL開館記念講演会 「女性史の過去と未来」

講師	ナンシー・コットさん(ハーバード大学教授)
日時	2018年3月24日(土) 13:30~17:30(13時受付開始)
会場	名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ 2Fレクチャールーム
参加費	無料(事前申込み不要)
言語	英語(日本語通訳あり)

コット教授を招いた一般公開セミナー

3月27日(火)「図書館とジェンダー」(13時30分~、通訳あり)

3月29日(木)「結婚と家族制度」(13時30分~、通訳なし)

4月 4日(水)「セクシュアリティとジェンダー」(13時30分~、通訳なし)

*詳細については、名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ(GRL)のホームページ(<http://www.grl.kyodo-sankaku.provost.nagoya-u.ac.jp/>)をご覧ください。

グローバル対話シリーズ 「図書館とジェンダー」

講師	ナンシー・コットさん(ハーバード大学教授)
日時	2018年4月5日(木) 18:30~20:30
会場	東京大学工学部 工2号館図書室
定員	50名
参加費	無料(事前申込み不要)
言語	英語(日本語通訳あり)

「グローバル対話シリーズ」は、女性図書館員の現状と課題を探り、生涯にわたるキャリア形成支援を目的としている団体「図書館員のキャリア研究フォーラム」が実施しています。第4回となるこの講演会は、(公財)日本女性学習財団と当研究所との共催で行われます。

2018年度 個人・団体研究助成 募集のお知らせ

2018年度も個人と団体の研究助成の希望者を募集します。

対象はジェンダー問題に関する未発表の研究で分野は不問。助成費は個人30万円以内、団体10~30万円。申請書はホームページからダウンロードしてください(FAXまたは郵送での請求も可)。

申込期間は2018年4月15日(日)~5月末日
消印有効。

詳しくは、ホームページをご覧ください。

『ジェンダー研究』第21号の 原稿募集のお知らせ

当研究所の年報『ジェンダー研究』第21号の原稿を募集します。

メインテーマは前号に引き続き「女性と労働」としますが、その他のジェンダーに関連するテーマも可です。

原稿の締切日は、2018年9月末日 消印有効。

詳しくは、ホームページをご覧ください。

賛助会員を募集しています。

賛助会費 年間 一口 1,000円
振込先 郵便振替口座 00820-0-77338
公益財団法人東海ジェンダー研究所

*会員の皆様には当研究所の年報『ジェンダー研究』やニュースレター「LIBRA」、講演会などの事業のご案内をお送りします。

*当研究所は公益財団法人の認定を受けており、会費及び寄付については税法上の優遇措置があります。

編集後記

巻頭言では、家族をこんなふうに定義できるのかと驚き、確かに危ういと納得してしまいました。新鮮な発見でした。

賛助会員のつどいには、寒空の下、会場いっぱいのお客様が参加してくださり、熱気に包まれました。また、パリのフェミニズム図書館の存続を勝ち取ったフェミニストの方たちの熱意には圧倒されます。女性図書館が未来へつながっていくと欲しいと願っています。